

小学校におけるオンライン英会話授業構成の一考察

岡崎 伸一*

A Consideration about the Teaching Procedure including an Online English Conversation Lesson in an Elementary School

Shinichi OKAZAKI

(Received August 31, 2022)

Abstract

This paper reports a consideration about online English conversation classes in an elementary school in Kumamoto. The observation of the classes had been done three times during the school year, 2021.

Classroom observations show positive reaction of the children and indicate that the teaching procedure including an online English conversation lesson works.

Key words : online, English conversation lesson, elementary school

1 はじめに

2021年度、熊本県球磨郡多良木町にある多良木町立黒肥地小学校からの依頼により、校内研修の講師として参加することができた。感染症の影響により、全てがオンラインでの実施になったが、継続的に外国語活動と外国語科（英語）の授業を参観できる貴重な機会となった。その内容は、校内研修の2回分（3年生の外国語活動の授業と6年生のオンライン英会話を活用した外国語科の授業）と中間発表会（2022年2月）の計3回であった。

黒肥地小学校での校内研修では、以下のように研究主題を設定していた。それは、「進んでコミュニケーション活動に取り組み学びを深める児童の育成～伝え合う喜びを共に実感するコミュニケーション活動の創造～」である。この研修主題の元、導入されて4年目を迎えるオンライン英会話を授業にどのように取り入れ、構成していくべきかを研修講師として託された。

この機会を通し、小学校におけるオンライン英会話授業の構成を考察し、一つの型として提案できればと考えた。

2 研究の構想図

年度当初に研究の構想図（図1）では、学校教育目標である「自立貢献」を最上位とし、これにつながるように「めざす児童の姿」と「研究主題」が設定されている。そして、外国語活動と外国語を通じて高学年では（友達同士で）「自分の考えや気持ちが伝わるように表現を工夫して話す子ども」、中学年では（先生達と一緒に）「自分の考えや気持ちを伝えようとする子ども」の姿を想定している。

この研究における仮説を以下のように立てられている。「外国語活動・外国語や他教科等の授業を通して、児童の学びの工夫をすれば、児童は進んでコミュニケーション活動に取り組み、伝える喜びを実感し学びを深めることができるだろう」である。この仮説検証のため、3つの視点を置いている。視点1は「学びに向かう工夫」である。これは外国語活動・外国語科においての工夫である。たとえば、必然性のある学習課題設定である。日常生活では英語に触れることは少ないが、英語を学ぶ必然性を感じることはとても大切なことである。また、振り返りの工夫を挙げている。熊本大学教育学部附属小学校で実践されている振り返りシートの活用をしている。そして、ALT・社会人講師・Online Teacher（以下、OT）の活用法を挙げている。OTが直接関係するオンライン英会話の活用も挙げている。

* 熊本大学大学院教育学研究科

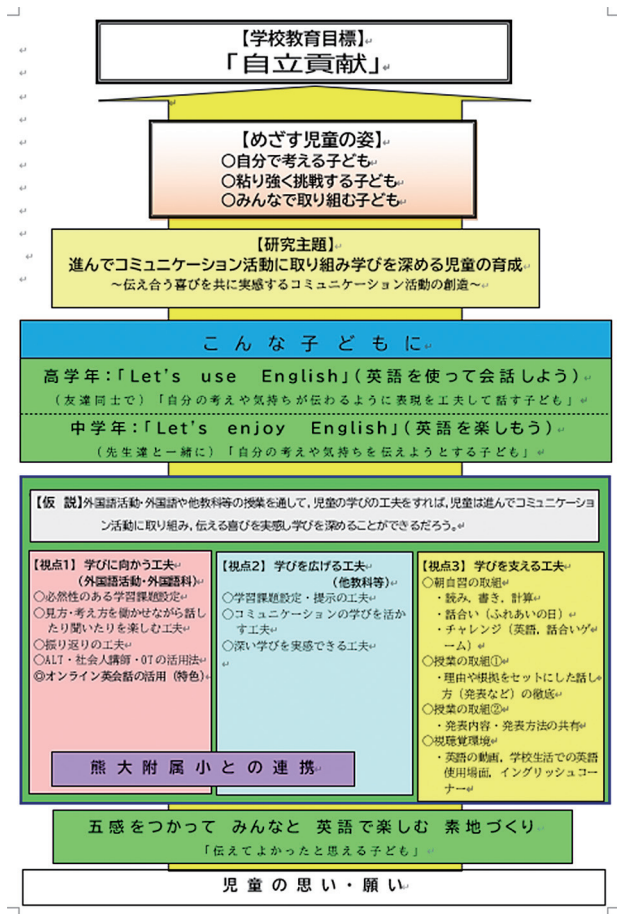


図1 研究の構想図

視点2として、「学びを広げる工夫」を他教科等とのつながりを挙げている。教科横断的な学びの工夫とも言えるであろう。

最後に、視点3として「学びを支える工夫」である。読み・書き・計算を扱う朝自習の取り組みであったり、教科を問わずに理由や根拠をセットにした話し方の徹底であったり、発表方法の共有することを設定している。

3 オンライン英会話の授業

2018年度から黒肥地小学校ではオンライン英会話の授業を導入している。株式会社学研プラスが提供する海外の外国人講師とマンツーマンの英会話レッスンである。授業時間は25分間である。テキストは、小中学校で習うとされる文法項目に合った内容が提供されている。オンライン英会話の授業の回数は自治体により異なるが、黒肥地小学校では年間12回のスケジュールが組まれていた。

オンライン英会話の画面（図2）にあるように児童一人一人が画面上ではあるが、対面し受講する。ヘッドセットを装着すると対面する外国人講師との

授業が始まる。基本的には「誰の手助けもなし」での緊張場面となる。



図2 オンライン英会話の画面

授業内容は挨拶から始まり、ターゲットとされる文法項目を含んだ表現の練習、やり取りをするタスクをこなすことになっている。

筆者が以前に赴任していた東京都品川区の中学校でも同様のシステムがほぼ同時期に導入されていた。品川区では中学2年生にあたる8年生がオンライン英会話の授業を月2回の年間で20回のスケジュールで受講した。その当時、パソコンルームにて生徒は一人一台でこの授業を受けていた。同会社からの提供システムであったため、形式は同様である。

4 3度の授業参観

2021年度に3回、授業参観をオンラインにて実施した。それぞれの参観について以下に記す。

4.1 外国語活動の参観（1回目）

2021年9月21日14:25～15:55に第3学年の外国語活動を参観した。単元はUnit4 I like blueで、本時の目標は「Tシャツをプレゼントするために、友だちや先生と好きな色を伝え合えることができる」であった。

授業導入では、初めの5分で挨拶、前時の学習を振り返り、そして授業のめあての確認をしていた。次の5分では、色ややり取りの仕方を確認し、「Do you like ~?」の表現をChantsを活用し行っていた。

授業展開では、友だちや先生とやり取りをし、色の好き嫌いについて尋ねていた。この活動後には中間評価をし、児童の良い点を共有していた。その後、より良いやり取りについて考え、再度やり取りの活動を行っていた。

授業終末では、前述した振り返りシートに記入し、本時の学習を振り返っていた。

前述した視点1の工夫にあるように、ALTだけではなく、社会人講師の活用をしていた。

筆者の講師助言としての視点で良かった点（◎）

と課題点（★）を示したものを下に記す。

- ◎子供たちのやる気
- ◎先生方の落ち着きのある対応
- ◎導入での練習の仕方
 - 例) QA の易しい A から児童に練習させている
A→Q→半分ずつに分けて練習していた
- ★全体での練習であったので数名指名し確認作業を入れることもできる。

- ◎活動で先生方の例示が上手
- ◎1回目と2回目の間の中間評価
 - 変容を挙手で確認していた
 - 再度、教師からの Q で練習をしていた
(児童各自での確認もあった)

- ★ワークシートに記載する量の調整をする。
(活動が終わり、次の相手に行く際に空白の時間が生じていた)

- ★空白時間を埋め、たくさんの人たちとの関わりを持たせるために、どのような T シャツが良いのか裏に描かせる(または書かせる)ことで時間調整をすることが可能になる。

- ★または、色+動物 (キャラクターなど) で創造性のある T シャツ作製ということもできるだろう。

- ★思考・判断・表現の観点で評価項目が指導案(学習構想案)に記載されていたが、児童の練習段階にあるため、別日にパフォーマンステストを実施する計画の方が教師も児童も取り組み易いだろう。

- ★肯定的な答での “Me too.” は活用できていたため、否定的な答である “Me neither.” を Small Talk から導入していくこともできるだろう。

4.2 外国語(オンライン英会話)の参観(2回目)

2021年9月22日、10:35~12:05に第6学年の外国語科を参観した。授業時間の途中の25分間は、オンライン英会話の授業を挟む形になっていた。単元は Unit4 Summer Vacation in the World で、本時の目標は「夏休みの思い出やその感想をたずね合う」であった。本時ではオンライン英会話を授業展開に位置付けており、外国人講師とのやり取りが上手に

展開できるように、授業導入部分にて児童同士のコミュニケーション活動の場面を設け、練習場面を設定する工夫がされていた。

授業導入では、初めの5分では挨拶、日常の定型の質問に答え、ゴールデンルールの確認をしてから、本時のめあての提示を行っていた。前述したように、児童同士のやり取りをし、オンライン英会話の活動にそれぞれが移行していった。

授業展開では、オンラインによる英会話であった。これは教科書の Unit4 の内容をやり取りで OT に「夏休みに行った場所やその感想について尋ねたり答えたりする」ことが学習活動とされていた。オンラインでつながるまでの間に授業導入で練習していた表現等を準備している児童の姿も見られた。前述した(3. オンライン英会話の授業)ように、オンライン英会話の授業が展開されていた。オンラインでの参観であったため、筆者が確認できた児童は少数ではあったが、OT と「行った場所、やったこと、そして感想」のやり取りができていた。

オンライン英会話後の授業展開2では、中間評価として OT との学習で新たに知ったことや出来事、困ったことなどを教師が板書に整理していた。ここでは How about you ? を Tips として与え、練習を行っていた。

授業終末では、5分間で振り返りをシートに記入し、本時の学習を終えた。

この授業では3名の教員がそれぞれの役割を明確にし、授業をされていた。また、オンライン英会話の活動もあるため、機器トラブルを含め、児童の対応をされていた。

ここでも筆者の講師助言としての視点で良かった点(◎)と課題点(★)を示したものを下に記す。

- ◎先生からの自己開示があることで、児童の返報性の現象が出るのが期待され、やり取りが促進される。
- ★教師は英語を発してから写真を貼るようにすることで教師の英語を聞かせるようにする。
- ★質問の方が難しいため、3名の先生方に Q をさせ、たくさん聞かせる方が良かっただろう。

- ◎オンライン英会話前に授業導入での復習を短時間でもされていた。

- ◎オンライン英会話では個別での学習化が可能となっている。英語が得意な児童にもとても良い。苦手な児童への対応も3名の教員でされていた。

◎オンラインでの確認ではあるが、ほぼきちんと取り組んでいたようには見えた。

◎Tips として How about you? を与え、使う練習もしていた。

★紙を見ると音読になってしまいがちになるので、起立させて、紙は机上に置き、アイコンタクトをとるようにやらせてみる。

※I went to the sea.を使っていたがI went to the beach.との違いが気になった。I went to the beach.の方が実際に合っていると思われる。

4.3 オンライン英会話の参観（3回目）

2022年2月10日、13:55～14:40に第6学年の外国語科を参観した。単元はUnit8 My Future, My Dreamで、本時の目標は「中学校生活や将来について話したり聞いたりすることができる」であった。

表1 オンライン英会話授業の構成

授業過程	時間	学習活動
導入	5分	挨拶、Small Talk Today's goal
展開1	25分	オンライン英会話
展開2	10分	中間評価
終末	5分	振り返り

オンライン英会話の授業がある場合、上表1のようにオンラインでの活動をメインとして、導入、展開1と2、そして終末とつながりを意識して授業の構成がされている。

授業導入では、初めの5分では挨拶、将来の夢についてのSmall Talkを行い、めあての提示を行った。

授業展開1では、オンラインによる英会話であった。これは教科書のUnit8の内容をやり取りでOTに「中学校生活や将来についての会話をする」ことが学習活動とされていた。ここでもオンラインでつながるまでの間に授業導入で練習していた表現等を準備している児童の姿が見られた。

オンライン英会話後の授業展開2では、中間評価としてOTとの学習で新たに知ったことや出来事、困ったことなどを教師が板書に整理していた。

授業終末では、5分間で振り返りをシートに記入し、本時の学習を終えた。

5 授業構成に対しての講評

2021年度に3度に渡って外国語活動と外国語の授業参観の機会を得たが、2月の参観では黒肥地小学校の中間発表も含まれていたため、学校側からの要望は、「オンライン英会話授業の構成」についてであった。当日の講評で提示した図を元に授業構成についてのことを以下に記す。

5.1 授業構成と流れ

図3にあるように、オンライン英会話の活動を授業展開の中心に位置づけている。表1にも示したが、オンライン英会話までの授業導入で表現等の練習をし、展開1へと有機的なつながりが見られた。

そして、オンライン英会話を受けて、中間評価があり、プラスアルファでTipsが与えられたり、その練習をしたりし、すぐにフィードバックと改善につながっていた。

最後に授業終末として、授業全体の振り返りをし、まとめていた。

45分間の授業が無駄なく構成されており、授業導入から展開であるオンライン英会話の緊張場面にスムーズに移行できていた。



図3 授業構成と流れ

5.2 授業構成をするために

図4にあるように、オンライン英会話を中心に据えつつ、45分の授業構成をするためには、通常授業

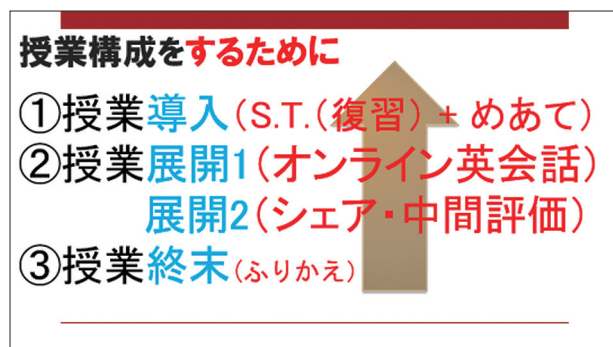


図4 授業構成をするために(1)

と同様に矢印の方向でバックワードデザインでの逆向き設計をすることになる。

バックワードデザインで構成しつつ、オンライン英会話を中心とすると図5の矢印の方向でどのようにつなげていくべきかを考慮する必要がある。

時間的にオンライン英会話の25分間が半分以上を占めている。そのため、導入や展開2、そして終末ではやるべきことを制限し、オンライン英会話での学びを最大限に生かす方向性が良い。

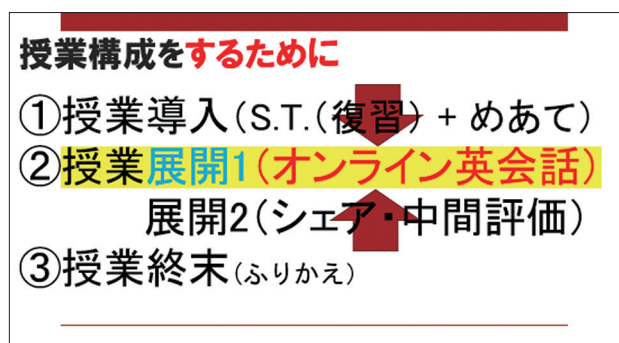


図5 授業構成をするために (2)

5.3 授業構成を何でつなげるのか

図6にあるように、実際に授業を構成するには何でつなげるのかを具体的に考えることになる。教科書は文法シラバスで作られている現状では、多くがこれに当てはまる。

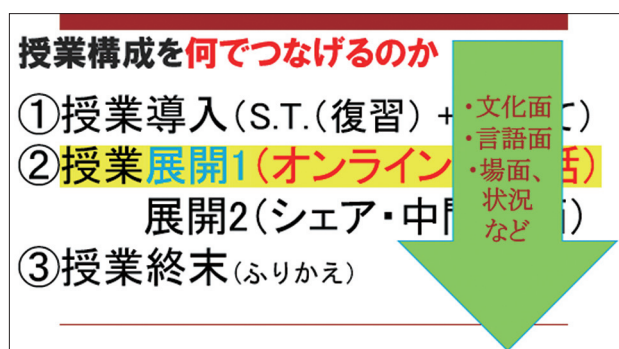


図6 授業構成を何でつなげるのか

しかし、図6内の緑色の矢印内に示したように、文法項目のみではなく、文化面でのつながりや言語の機能面でのつながり、または場面や状況、目的でのつながりとして授業を構成することも可能である。どのような目的をもって授業構成していくのかを学校や学年、担当者が熟慮した上で決定していくのが良いだろう。

5.4 授業構成の提案

小学校でのオンライン英会話授業での構成は黒肥

地小学校での実践を受け、以下三点を提案した。

- ①型として授業が機能している。そのため、この授業構成での実践を継続していく。
- ②校内の他の先生方にもこの授業の型を共有し、共通実践を行う。また、近隣の小学校においても同様に共有し、広めていく。
- ③学期や年度で実践内容や授業過程のつながりを微調整していく。

公立小中学校では人事異動に伴い、実践が継続されにくいことが多くある。そのため、誰もが負担なく実践しやすい型がある方が適切であると考えた。

6 児童の振り返り

授業後すぐに2名の振り返りシートをPDF化し、送信していただき、確認することができた。児童とOTとのやり取りの振り返り部分を以下に記す。

一人めは「(前省略) OTに聞く時間がなかったけど自分の将来の夢などをはなすことができよかったです。」(下線部付記は筆者によるもの)

もう一人は「(前省略) OTの将来の夢やおしをきけたのでよかったです。自分の将来の夢も、OTに伝えることができOTがおーがんばれといってくれたのでうれしかったです。」(下線部付記は筆者によるもの)

上記の下線部部分が、児童がOTへ自分のことを伝えることができたことや、やり取りをすることができた成就感が表現されている。

他の児童も同様だと仮定するならば、仮説の一部ではあるが「伝える喜びを実感」はできているだろう。

授業の様子を観察した際には、外国人講師から対面で英語を学ぶことへの情意フィルターは低いと思われる。月に1, 2度の貴重な機会を楽しんでいるようにさえ感じられた。

7 考察

前述した「4 3度の授業参観」から「6 児童の振り返り」までにおける児童の反応や行動、振り返りシートの言葉などからは肯定的なものが多い。当然、オンラインでの参観であるが故に、見えていない部分もあるだろう。しかし、授業での児童の行動は活発的であり、やる気のある姿が観察された。

オンライン英会話の回数は年間で12回と多くはない。そのため、言語習得の視点からすると生の英

語に触れることは少ないが、外国人講師とのオンラインではあるが対面し、やり取りをする経験は児童の「伝えたい」「やり取りをしたい」という心に火をつけているのだろう。

成功体験ばかりではなく、OT とのやり取りが上手にできていなかった児童もいたであろうがオンライン英会話授業のみで完結しておらず、授業展開 2 でフォローアップがされている。オンライン英会話では 3 名の教員による支援や児童が使える Help カードや質問集もあり、この授業を支える体制が構築されている。そのことから、児童は安心して外国人講師との授業を楽しめるものになっていると考えている。

「5.4 授業構成の提案」で前述した 3 点について、継続・発展していくことを願うばかりである。

8 おわりに

2022 年 8 月に文部科学省から『英語教育・日本人の対外発信力の改善に向けて（アクションプラン）』が報道発表された。これはデータに基づき、英語力や対外発信に関する課題が示されている。この中では、「1. 学校英語教育の底上げ」の中で「④学校外における自主的・自発的な学習意欲の向上」で「外国語指導助手（ALT）や英語が堪能な地域人材の活用を一層促進」や「一人一台端末を活用した海

外との交流の促進」が明記されている。

この発表は、主に中学校・高等学校に向けたものであろうが、小学校から「英語」が導入された以上は、小学校における英語指導の方向性の一つともなり得るだろう。しかし、黒肥地小学校では、すでに英語が堪能な地域人材の活用や一人一台端末の活用した海外との交流（オンライン英会話）を実施している。今後、小学校でオンライン英会話の授業を実施する学校が増え、効果を上げていくことを期待したい。そして、対外発信力も備えた児童が中学校で活躍する姿を拝見することを楽しみにしている。

参考文献

- 白畑知彦・富田・村野井仁・若林茂則(2009).『改訂版 英語教育用語辞典』p.12. 東京：大修館書店
- 文部科学省（2018）.『ICT を活用した指導方法（1 人 1 台の情報端末・電子黒板・無線 LAN 等） ～学びのイノベーション事業実証研究報告書より～』https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/08/07/1369632_1_1.pdf 2022 年 2 月 2 日閲覧
- 文部科学省（2022）.『英語教育・日本人の対外発信力の改善に向けて（アクションプラン）』https://www.mext.go.jp/content/20220808-mxt_kouhou01-000024386_01.pdf 2022 年 8 月 24 日閲覧